

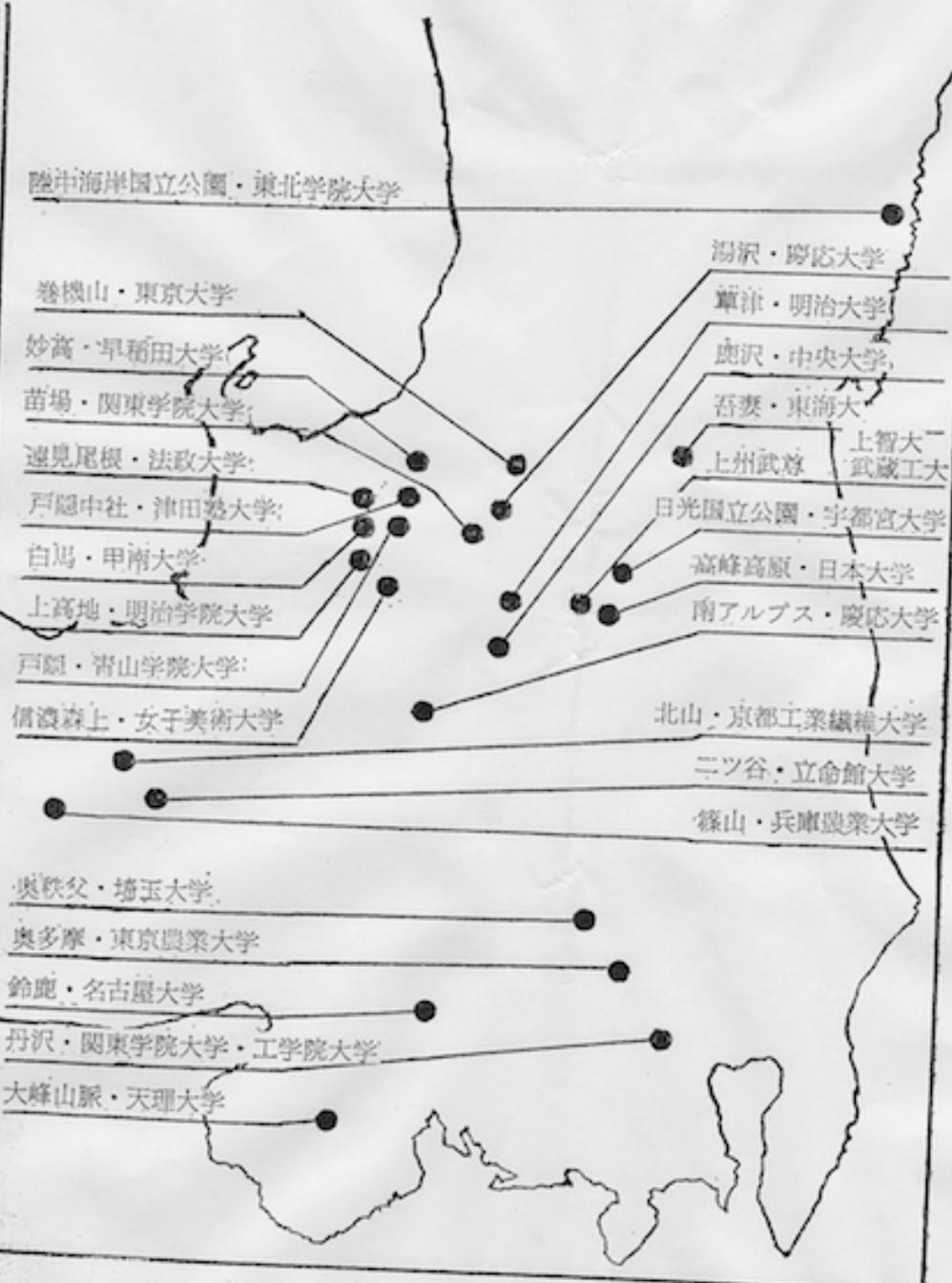


ワンデルン
創刊号

1963

—全日本学生ワンダーフォーゲル連盟—

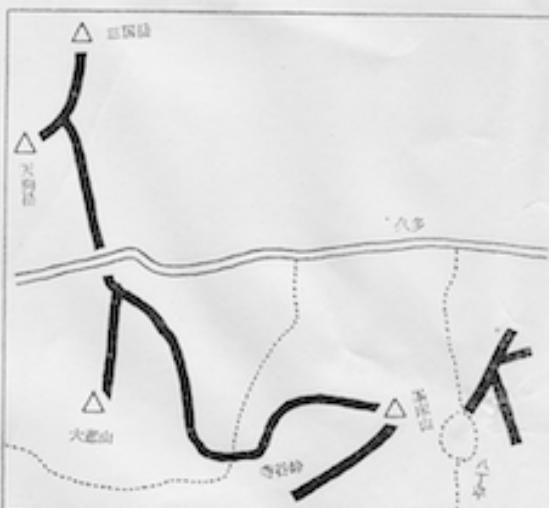
我らの繩ばり



北山

京都工業織維大学

春秋にハイキングでにぎわう京都北山も少し足を伸ばして奥に入るとまだ、そこには自然そのままの姿がある。



の地図がかかっていて、自分達の足跡が赤線でトレースされていく。いつの間にかその殆んどが朱で染まってしまった。これと云つて目ぼしいピークも無いのだが、うっそりとしたシダの原や、渓流の清らかさ、又時にはすごいブッシュに悩まされ、胸までのラッセルに苦労することもある。テントを張るのがおっくうで炭焼小屋を見つけては、一晩をあけたこともあった。八丁平の湿原、由良川の渓谷、三国岳辺の谷々など特に印象的である。願わくば北山の静かな地に小さい山小屋が欲しい。私達のささやかな夢である。

二ツ谷

立命館大学

我々のクラブでは、創立このかた連続として「自分達の山小屋」を持ちたい、という夢がはぐくまれてきました。

この夢を現実のものへと成しとげた直接の機運は、一九六一年の大峰山の旧人合宿及び比良山の新人合宿であり、ここに於て、合宿後食料の残ったのを幸いに、山小屋に居残った下級生の間で、「自分達がアルバイトして

でも得るお金を資金として、こじんまりした僕等の山小屋がほしい。学校その他運動具店等一切の援助を受けない」という方針を打ちました。

当時、資金といっても、そのメドの無いままに、この一見なにげない話から、早速理工学部を主軸に、青写真が修正に修正を加えられていきました。しかし、他校同様、常識的過程として、土地探し先決論が興りました。が、血氣にはやった我々は、この先決論を退けました。成程、これは常軌を失しているかも知れません。しかし、結果はかえって、くすぶつっていた浮動組を、青写真を次から次へ発表していくことで、建設の機運を盛上げました。

建設地としては、気軽に行ける所を基準にして、北山周辺に六候補地がありましたが、結局、近くって、スキーが出来、水の便が良く、しかも比較的ハイカーに荒されていないということから、京都府下芦生三ノ谷の現在地に決められました。所が、保安林内なので何かと手続きに手間どりました。

工事着工は一九六二年三月二十五日。翌日雪に見舞われましたが、「近代工事は道づくりから」ということで、ボッカコースの整備に

かかりました。始め安易に考へていたドカチ
ンも、最深部では七米余も山肌を掘り崩さね
ばならず、工事は容易にはかどりません。そ
こでドカチーンと平行して、一時間余の山道
に、ボッカ隊がくり出されました。始めのう
ちは三〇～四〇kgのジャリや砂でしたが、回
を増すにつれて防水ブロック四個（六〇kg）
又はセメント一袋（五〇kg）へと進み、日曜
日などは沢のあちこちで飯盒炊はんしている
ハイカーを横目に、ヒイヒイハアハアとかつ
ぎあげました。鉄骨を組み、仮ワクを組んで
基礎コンクリート打ちを慎重に行つたが、な
にしろ、施行監督はなれぬ手つきの土木科の
学士の卵ですから、出来上りは今流行のワイ
ド版よろしく、両端がそり返つてしまいまし
た。ままよ上にのせるブロックで調節すれば
よいということにして、ブロック積みにかか
りましたが、誰も経験がなく、小耳にはさん
だ知識をもとに、見よう見まねでモルタルを
つめていきます。所が、目地ゴテが思うよう
に使えず、手を器用に使い、面の皮が厚いに
もかかわらず、手の皮がむけたと涙まじりに
訴える輩が現われた次第です。

かくして土台は出来ましたが、屋根となる
と、さしもの学士さま団体も、建築科生を持

たぬ我々には、お手上げとなり、大工の手を
借りざるを得ませんでした。

延人員一二〇〇人、使ったブロック四一七
個、セメント四四袋、ジャリ石・砂共トラック

ました。

階下が八帖の板の間と六帖の土間、二階は
六帖の板の間が全てですが、先輩格の京大ワ
ンゲル小屋を、ひとまわり大きくなった規模で
す。地元の人の話によると、毎年二米前後の
積雪があるということより、屋根の勾配を五
〇度にとりました。それで屋根の雪が滑べり
落ちて、今では辺り一面が紙白の雪山に、一
点、ベンガラ色がひときわ映えます。

小屋の位置は花背スキー場の近くですが、

最近の大雪のため、夏場では三〇～四〇分で
行けるコースが、四時間も要し、手軽にスキ
ーの出来る所ではなくなってしまった。加えて
スキーに最適な期間が試験期と重なり、スキ
ーはもっぱらアルプス山麓へ出て行くことと
なりました。

とにかく、ブロックがどんなにゆがんで並
んでいようと、学生の身である我々が、土
日曜日と各休暇を利用して「資金から建設過
程の全てを通じて各会員の自主的参加のみで
完成させ得た」というこの一事実から、現在
各会員はしばし、その疲れを癒し、溢れる喜
びをしみじみと味わい、深い感情にひたっ
ています。落成早々で、年間計画は未だ出来
ていませんが、遅ればせながら梅の香りを漂



わす三月から四月初旬にかけて、雪の間をぬって訪ねる悦び、五月に入れば、新人さんが真新しい天井をながめて、シラフの中で夢を結ぶだろうことと、これからはつきません。

又、夏前にはドラムカンを運び上げて、風呂を造らなければならないだろうし、電気科の学生は、水の落差を利用して、一〇〇ワットくらいの電気は起せるかも知れないなどとうそぶいています。

我々は又、町の少年達を招待して山小屋の味を知つてもらおうとも計画しています。

(文責 委員長 鈴木正博)

篠山

兵庫農科大学

篠山は盆地である。デカンショ節の本場である。一般に山深い所と思われているが、案外一度来た者なら今までのイメージを変えなければならないのに気がつくだろう。盆地の北側に位置する通称多紀アルプスなる一連の山は、瀬戸内海と日本海とに分かれて注ぐ分水線の位置にあたっているのである。小金岳、

嶽岳、西岳の中心となる三山はそれぞれスケールこそ小さけれ、特色を持った山々である。小金岳は春には一重のヤマブキや高山植物のシャクナゲも目に見える事ができ、夜に聞く野生のサルの声には、聞きなれぬ人には驚きとなろう。嶽岳は多紀郡中の最高峰で七九二、二米で展望の素晴しさは、ここに来た者だけが味わうことが出来るのである。南には低く長く連なる六甲山系の左端から大阪湾の鏡をちらっと見る事もある。北側は丹波の山々があり、その向う側は日本海と思うと、日本の国土の狭さがひしひしと感じられるのもこれらの山頂に立った時に思われるぐら

いであろう。そういう気持は普通の山であれば、思わない事であろうが、そういう感じを起させるのが嶽岳に他ならないのである。西岳は前の二岳よりは山の魅力は劣るが、野生ザルの多紀郡中の宝庫である。水の流れのある所必ずサルの足跡を見つけずに水を飲む人はいないぐらいた。シャクナゲを一番多く見かけるのもこの山である。兵庫県が大阪、京都の二府と接する三差路のような位置にあるので、交通の便が良くなり、人々が篠山周辺を再認識し始めた今日では、春・秋には京阪神からの自然愛好のサークルや団体が多紀ア

ループスを訪ずれない日曜日はないのが現状で

ある。
多紀郡やその周囲の山々に関する詳細は前もって連絡下されば最善の努力でもって御手伝いさせていただきます。

奥秩父

埼玉大学

フランチャイズと言つては大げさに聞こえ



機関誌発行実行委員会

責任者 戸塚 孝郎（関東編集）（上智大）

委員 伊藤 紀文
（東大）

委員 鈴木 實彦
（明治学院）

委員 内藤 寿夫
（東大）
（明治学院）
委員 直井 忠紀

編集後記

今迄に三号まで続いた年鑑を、今年から内容を二分して出すことになりました。

今迄の年鑑の年鑑らしからぬ部分、つまり紀行文、雑文、特集記事等を集め、読んで楽しめるものを、と思いここに「クワンドルン」創刊号を発刊するはこびとなりました。

「クワンドルン」とは「歩く」「さすらう」等の意味で、我々のワングーフォーゲル運動が永遠に継続し、発展することを祈つてこの名をつけました。

企画編集にあたった者全員が、この種の仕事に大変不慣れであったため、決して完全なものとは云えませんが、忙しい身にムチ打ち、精一杯の努力はした積りです。この本が読者の慰めとなり、また、参考にでもなれば幸いです。

紙面の都合等で、各校の御協力により沢山集った原稿の中には、残念ながら掲載出来なかつたものもありますが、御諒承下さい。この「クワンドルン」に沢山の広告を寄せられた広告主の御厚意、原稿を寄せられた方々の御協力に、誌上を借りて深く感謝の意を表したいと思います。またこの本を作成するにあたっては、太陽印刷の方々の並々ならぬ御協力を得ましたことを深く感謝致します。

（機関誌発行実行委員会）

昭和三十八年

ワンドルン 創刊号

昭和三十八年五月印刷

編集責任者

小松 原正直
吉村 和宣

発行責任者

発行 東京都千代田区神田錦町
中央大学ワンドルン部内
全日本学生ワンドルン連盟
印刷 東京都新宿区市ヶ谷合町二二
太陽印刷工業株式会社